

平成 27 年 4 月 24 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

伊東沖断層の長期評価

1980年6月29日に発生した伊豆半島東方沖の地震（マグニチュード6.7）（注1）の解析結果に基づいて、伊東沖断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 伊東沖断層の特性

項目	特性	信頼度 (注2)	根拠 (注3)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	伊東沖断層		
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 (北端) 北緯34° 58.3' 東経139° 10.6' (南端) 北緯34° 51.4' 東経139° 12.6'	△ △	文献3
	地表の断層の長さ 不明 一般走向 約N14° W	△	断層の位置から計測
(3) ずれの向きと種類	左横ずれ断層	◎	文献1、3、4
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	◎	文献1、3、4
(2) 断層面の幅	上端の深さ 1km	△	文献5、6及び地震発生層 下限深度から推定
	下端の深さ 約10km	△	
	断層面の幅 10km程度	△	

(3) 断層面の長さ	地下の断層面の長さ 13km程度以上	△	文献3、4、 5、6及び最 新活動時の地 震規模から推 定
3. 断層の過去の活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明		
(2) 過去の活動時期	最新活動 1980年（1980年伊豆半島東方沖の地震）	◎	
(3) 1回のずれの量	1－2 m程度（左横ずれ）	○	文献6及び断 層長さに基づ く経験式（文 献2）から推 定
(4) 平均活動間隔	不明		
(5) 過去の活動区間	全体が1区間として活動	○	
4. 活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模	マグニチュード6.7程度	△	最新活動から 推定
5. 地震後経過率			
地震後経過率（注4）	不明		

注1：関東地域の長期評価は、その活動が社会的、経済的に大きな影響を与えると考えられるM6.8以上の地震を主対象としている。本断層で発生した1980年伊豆半島東方沖の地震はM6.7であるので、本来は評価対象ではない。しかし、同地震は実際に被害（負傷者8名、家屋被害530棟）を生じたことを勘案して評価を行った。

注2：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○中程度、△：低い

注3：参考文献

文献1 気象庁地震課・三島測候所（1982）：1980年6月29日伊豆半島東方沖の地震とその前後の群発地震活動調査報告，験震時報，46，7-32.

文献2 松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，55，795-855.

文献3 Matsu' ura, R. S. (1983): Detailed study of the earthquake sequence in 1980 Off

the east coast of the Izu peninsula, Japan, *J. Phys. Earth*, **31**, 65-101.

文献4 佐藤良輔編著 (1989) : 日本の地震断層パラメター・ハンドブック, 鹿島出版会, 390p.

文献5 Takenaka, H. (1987): Strong motion modeling of the 1980 Izu-Hanto-Toho-Oki earthquake using near-field seismograms, *J. Rac. Sci. Hokkaido Univ. Ser. VII (Geophysics)*, **8**, 155-172.

文献6 Takeo, M. (1988): Rupture process of the 1980 Izu-Hanto-Toho-Oki earthquake deduced from strong ground motion seismograms, *Bull. Seismol. Soc. Am.*, **78**, 1074-1091.

注4 : 最新活動 (地震発生) 時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。